

上徳不徳

## 全建会員として知っておきたい 家康の江戸建設

一般社団法人 全日本建設技術協会 会長 おお いし ひさ かず  
大石 久和



今日の大東京は徳川家康の江戸建設にルーツを持っていることは常識なのだが、なぜ家康が江戸という場所を受け入れたのかや、江戸をどのような手順で整備していったのかなどについて謎であったり、十分に知られていないことが多くある。

これを少し復習して、今日の建設人の参考に紹介したい。なお、本稿は鈴木理生氏の「江戸はこうして造られた」（ちくま学芸文庫・2000年1月）を参考にしている。本書は江戸建設について類書に見られない知見に満ちており、興味のある方には是非一読をお薦めしたい。

今日、常識のように流布している説明では、小田原攻めの際に家康は秀吉から「北条滅亡の後には北条支配の関東を与えるが、旧領は召し上げる」と告げられ、天下人の命令には従わざるを得ず、泣く泣く荒涼たる低平地の江戸を受け入れたということになっている。

これは、今日では神君家康の権威を高めるために江戸時代に流布した幕府側の宣伝の意味が大きいと言われている。荒れ地の江戸を整備した天才家康の子孫が幕府を率いているのだから、政治を任せても大丈夫なのだと言われ、武家や庶民に思わせる創作話だということである。

これが一面の真理だというのは、江戸の開発のために家康は実に見事な手順と手法で天下を

預かるにふさわしい都市を造り上げたからであるが、一面にとどまるのは「家康（秀吉も）は江戸の位置的な重要性を知っていた」のだというものである。

江戸という名称は、歴史的には地名として登場したのが初出なのではなく、人名として表れたのが最初だという。頼朝が伊豆での挙兵に失敗し、三浦半島から海上経由で房総半島に逃れた後、京攻めのために関東武士の支援を得て隅田川（利根川）に到着したとき、初めは頼朝に反旗を翻していた江戸太郎重長が仲間の説得により頼朝に与力することとなった。ここに「江戸」という名称が個人名としてだが初めて歴史書に表れたのである。

この時、頼朝は重長に対して「江戸太郎ハカ国の大福長者」と呼んだというのである。これは武家に対する形容ではない。もちろん武家の要素もあったのだろうが、大福長者とは商人に対する呼称だ。

それはなぜなのか。重長は江戸前島（現在の銀座や日本橋を含む地域）を支配していたのだが、その実態は武家でもあるが大商人というものであった。というのも、当時のこの付近で栄えていた港は、歴史書にも多くの船舶が寄港して繁栄していたとの記録がある浅草と目黒川河口の品川、そして江戸前島であったからである。

この時代には関東は、現在の和歌山、三重、愛知方面と海岸伝いの舟運で結ばれており、これらの港が重要な役割を果たしていたというのだ。その証拠として鈴木氏があげているのが関東一円に広がる紀州ルーツの熊野神社信仰であり、時代が室町時代に下がって来ると三重の伊勢信仰となることである。

そして重要なのは、江戸前島が鎌倉円覚寺の所領であったことである。円覚寺の所領は全国的に河川の合流部や河口部、海岸の沖積地に分布し、内陸でも交通の要衝を占めていたことがわかっている。最古の円覚寺領である尾張国富田荘は、庄内川河口の沖積地と自然堤防のある地域である。こうした武家支配外の寺領地や神社領地に市場が成立して、商品の流通や商業を活性化させる機能を担ったのだった。武家支配地の間に寺社の所領が確保されたのも、市場を設ける場所が必要であったためだった。

尾張地方をルーツに持つ家康は、富田荘の繁栄を通じて同じ円覚寺領であった江戸前島の位置的な重要性を理解していたと考えられる。なぜなら、天下人となってからも家康は江戸から離れようとしなかったからである。江戸の本格整備は家康の天下人以降のことなのだ。

江戸は日本人が初めて臨海低地に意識的・組織的に都市を造った場所であり、また大規模な埋め立てを行って市街地域を造成した街であった。その整備は①家康の江戸入りから幕府を開くまで、②それに続く豊臣家滅亡まで、③幕藩体制確立後と大きく三段階に分かれる。家康のすごいところは、初めから大風呂敷的な大開発を行ったのではなく、段階的に少しずつ、それもまったく正しい手順で江戸を造り上げて行ったことである。

最初の事業は江戸城での塩の確保であった。利根川（今の江戸川）の河口に行徳があり、そこは利根川舟運を利用した燃料確保が可能であることから大製塩地となっていた。そのため、江戸城から江戸前島を横切る形で道三堀を整備し、それに続いて古利根川（中川）までを海岸に沿って小名木川を通し、更にその先を行徳まで新川を造ったのである。

これで安定的な塩の確保を図ったのだが、これらの内陸河川はやがて廻船時代になると、「内川廻し」という海の状況に左右されずに安定した物流ルートとなる重要な水路となった。

江戸が道灌時代後の北条氏時代に八王子城以下の支城レベルに置かれたのは、飲料水の確保が難しかったからであった。次の課題は水資源の確保だった。そこで城廻の小河川をダムで堰き止めて現在の千鳥ヶ淵、牛ヶ淵を造ったのだ。

しかし、なお不足する上水の需要を満たすため、神田上水を用意して神田川から取水することとした。潮の干満の影響がなくなる上流地点からの取水が必要で、それは現在の地名では文京区の関口であった（もとは堰口、ただし諸説あり・玉川上水整備はこの約60年後）。

モーターもポンプもなかった時代には自然勾配を利用するしかなく、堰口でも水位を上昇させて取水し流下させたのだが、その給水勾配は約1.51パーミルだというのだから、当時の測量と施工の技術力の高さに驚くのである。

こうした準備を整えて、時代はいよいよ1603年の家康の征夷大將軍就任以降の「江戸の天下普請」の時代を迎え、本格的な都市整備、関東平野の改造が始まるのであった。